

〔研究会報告〕

アンソニー・ミルナーの報告
『マレー人の探求——民族、表現、論争、そしてイスラーム』

塩崎悠輝（同志社大学大学院）

2006年12月7日、東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）にてアンソニー・ミルナーによる“*Searching for the Malays: Ethnicity, Representation, Contest and Islam*”と題された報告が行われた。アンソニー・ミルナーはオーストラリア国立大学のアジア史教授であり、主な著書に *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*¹、*The Invention of Politics: Expanding the Public Sphere in Colonial Malaya*²等がある。ミルナーの報告は、13世紀から現代に至るまでの「マレー人」という概念の多様な歴史的形成、その変遷、および様々な「マレー人」概念が形成された背景について、数多くの先行研究やジャーナリスト、政治家、行政官らの広範な言説を参照しつつ論じたものであり、マレーシア研究における大きなテーマである「マレー人」という民族、国民についての考察に多大な示唆をもたらすものであった。報告の概要は以下のようなものであった。

19世紀初め、スタンフォード・ラッフルズは、「マレー人」のことを「広い範囲にわたって分布しているがその特性と慣習を保持し、ひとつの言語を話すひとつの民、ひとつのネーション」と述べた。しかし、地理的にどの範囲までを「マレー人」とみなすのか、スマトラ、ジャワ、ブギスの人々は「マレー人」なのか？「マレー人」であることの条件とは何であるか、アラブ系、インド系のムスリムは「マレー人」なのか？といった問いへの答えは、時代によって、あるいは立場によって異なってきた。ロバート・ヘフナーも述べているように、「マレー人」とは「フレキシブルなエスニシティ」なのである。ミルナー自身は、1. クラジャアン（スルタン[ラジャ]と民[ラヤツ]の共同体）、2. バンサ（民族の共同体）、3. ウンマ（ムスリムの共同体）という三つの共同体の成員であることを基本的な「マレー人」の要件と考える。

17世紀前後から20世紀に至るまで、「マレー人」概念は地理的に狭い範囲に限定された

¹ Milner, Anthony (1982) *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*. American Association of Asian Studies Monograph.

² Milner, Anthony (2002) *The Invention of Politics: Expanding the Public Sphere in Colonial Malaya*. revised edition paperback. Cambridge, New York and Melbourne: Cambridge University Press.

ものと広い範囲までおよぶものがあつた。16世紀、パターニー王国では、「ムラユ」とはマラッカとそれに連なるジョホールのみを指していた。一方で、当時のポルトガル人、オランダ人は、マレー語を話すムスリムであるブギス人、ジャワ人を含む「商業的ディアスポラ」、海を越えて活動し港市国家を活性化させた人々をすべて「マレー人」と呼んだ。また、『マレー年代記（スジャラ・ムラユ）』はパハンやクダーにおける文化、儀礼にも言及している。イギリス植民地統治以前、マラッカ＝ジョホールのみに限定された狭義の「マレー人」概念と言語・文化・儀礼を共有する文明集団としての広義の「マレー人」概念があつた。

19世紀初めに自伝的物語を著したムンシ・アブドゥッラー、20世紀初めのジャーナリスト、ムハンマド・ユース・アブドゥッラーらの言説を経て、近代の「マレー人」概念が再形成されていった。植民地統治は民族概念の形成に大きく作用した。20世紀になると「マレー人」というバンサを抛り所とするナショナリズムが発生した。イブラーヒーム・ヤーコブに代表される、インドネシアを含めた広域の「マレー人」を視野に入れたナショナリズムも存在したが、マレーシアのスルタン制度＝クラジャアンを重視する勢力に追いつき落とされ、トUNK・アブドゥルラーマンらの UMNO がマレー・ナショナリズムを「ハイジャック」し、マレー・ナショナリズムはマレーシアの国家内に限定したものとされた。

マハティールはマレー・ナショナリズムを掲げつつも、スルタンを頂点としたクラジャアン制度とは対立した。近年、「マレー人」であることとムスリムであることがどの程度一致するか、という問題が重要性を増している。「イスラーム化」の進行が、「マレー人」の概念を改めて問い直しつつあるのである。

ミルナーによる報告は以上のような概要であつたが、「マレー人とは誰か？」という範囲の問題が、過去の歴史のみならず現代政治においても極めて重要であることを再認識させられた。現在、「マレー人」の範囲が再び問われ、イスラームに焦点が当てられているのは、「イスラーム化」の進行によるものであるとともに、それ以前から続いている公教育によるマレー語の普及や国民統合政策、マレー人の都市化のためでもあるだろう。もはや言語や出生地、クラジャアンへの帰属によっては整理できなくなった「マレー人」アイデンティティ判別のために、イスラームが持ち出されている。